

魯迅における異文化受容

叢 小 榕

中国社会の激動期に独自の作風で世相を痛烈に諷刺・批判し、新文化運動において重要な役割を果たした魯迅は、当然ながら、異文化の受容を提唱する急先鋒でもあった。「阿Q正伝」^(注1)において、街の洋式学堂に通い、東洋（日本）にも行ってきた若旦那を、阿Qは「假洋鬼子」（偽外人）と呼び、「外国のスパイ」と見なして憎悪する一方、若旦那の切り捨てた辮髪（べんぱつ）の代わりにつけた辮髪（べんぱつ）の鬘をも極度に忌み嫌うとあるように、異文化を排除しようとする一方、良し悪しを問わずに伝統を頑なに守ろうとする社会的痼疾を容赦なく曝している。魯迅の異文化受容は、彼の作品において多方面にわたって現れているが、翻訳や漢字のラテン化（ローマ字化）に関する議論に魯迅のその姿勢が強く反映されている。

一 外国人名の音訳について

魯迅は「不懂の音譯」^(注2)において、「外国人の姓名を音訳で翻訳するのは、極めて正当で、ごく普通のことだが、まったく常識のない人でない限り、決して余計な議論をしないようである」と提起したうえで、「屠介納夫」（ツルゲーネフ [Ivan S. Turgenev]。今日「屠格涅夫」と訳される）、「郭歌里」（ゴーゴリ [Nikolai V. Gogol]。今日「果戈理」と訳される）のように、外国人名の翻訳において、中国の「百家姓」を適用する（「屠介納夫」の「屠」、「郭歌里」の「郭」）ように、古代の翻訳に比べて、中国の伝統に沿うようになっていたにもかかわらず、「新文学者になる秘訣の一つに、『屠介納夫』『郭歌里』といったわけのわからない文字を使うことだ」と揶揄する向きを取り上げ、異文化に対して拒否反応を示す傾向を鋭く指摘した。そして、清朝末の留學生の刊行物に登場した「柯伯堅」（クロボトキン [Petr Alekseevich Kropotkin] 今日「克魯泡特金」と訳される）以来、外国人名の翻訳に「百家姓」を適用するのが「今日の翻訳界においては、ほとんど常習となっている」という現状に対して、「今日の翻訳家は古代の和尚に大いに学ぶべきだと思う。人名にしても地名にしても、発音のまま訳し、苦心して飾る必要もなければ、（後になって）改める必要もない」と、「百家姓」の適用さえ不必要だと主張する。一方、「咬文嚼字」^(注3)において、魯迅は次のように嘆く。

以擺脫傳統思想的束縛而來介紹世界文學的文人，卻偏喜歡使外國人姓中國姓：Gogol 姓郭；Wilde 姓王；D'Annunzio 姓段，一姓唐；Holz 姓何；Gorky 姓高；Galsworthy 也姓高，……我真萬料不到一本《百家姓》到現在還有這般偉力。

（伝統思想の束縛から脱却することを以て、世界の文学を紹介する文人は、こともあろうに好んで外国人に中国人の姓をつける。Gogol の姓を郭とし、Wilde の姓を王とし、D' Annunzio の姓を段とし、または唐とする。Holz の姓を何とし、Gorky の姓を高とし、Galsworthy の姓も高

とする。(中略)一冊の「百家姓」が今以てこれほどの偉力を持っているとは思ってもいなかった。)

現に、人名や地名が発音のまま音訳されるのが一般的になっている今日においても、イギリス人のパッテンが「彭定康」、フランス人のジュリアンが「朱利安」というように、中国に住む漢字文化圏以外の外国人で、「百家姓」から姓を取り、中国風の名をつける風習はいまだに根強い。漢化によって、異文化が受け入れられやすくなるのも事実であることを意味する。異文化を受容しながらも、伝統文化の「偉力」は依然として無視できない存在となっているのである。

二 翻訳における「信」と「順」

翻訳において、「信」（原文に忠実）と「順」（訳文が流暢）はいまだに課題として議論が繰り返されているところだが、自ら認めたように、魯迅は翻訳において、硬訳（直訳）、つまり「信」に重きを置く。「信」と「順」について、魯迅は「幾条順的翻訳」^(注4)で次のように述べている。

因為“信而不順”的譯文，一看便覺得費力，要藉書來休養精神的讀者，自然就會佩服趙景深教授的格言。至於“順而不信”的譯文，卻是倘不對照原文，就連那“不信”在什麼地方都不知道。然而用原文來對照的讀者，中國有幾個呢。這時候，必須讀者比譯者知道得更多一點，才可以看出其中的錯誤，明白那“不信”的所在。否則，就只好胡里胡塗的裝進腦子裡去了。
(「信にして順ならざる」訳文は、読み始めから苦勞するため、書物で精神を癒やそうとする読者は、当然ながら趙景深教授の格言^(注5)に感心するだろう。「順にして信ならざる」訳文に至っては、原文と照らし合わせなければ、その「信ならざる」がどこにあるかさえわからない。とはいえ、原文と照らし合わせる読者は、中国に何人いるだろう。こういう場合、読者は訳者よりもっとよく知っているはじめて、誤りを見抜き、「信ならざる」の所在がわかる。さもなければ、わからないまま頭の中に詰め込むしかない。)

譯得“信而不順”的至多不過看不懂，想一想也許能懂，譯得“順而不信”的卻令人迷誤，怎樣想也不會懂，如果好像已經懂得，那麼你正是入了迷途了。
(「信にして順ならざる」訳文はせいぜいわからないくらいで、考えてみればわかるかも知れない。だが、「順にして信ならざる」訳文は人を迷わせ、どう考えてもわからない。もしわかったような気がしたとすれば、まさに迷い込んだのである。)

わかりにくくても、原文に忠実でなければならない。換言すれば、原文に忠実でない流暢な訳文は、誤解を招くことになると魯迅は主張し、それを「乱訳」^(注6)と定義する。原文に忠実な翻訳を肯定する理由について、魯迅は「關於翻訳の通信」^(注7)で次のように述べている。

翻譯——除去能夠介紹原本的內容給中國讀者之外——還有一個很重要的作用：就是幫助我們創造出新的中國的現代言語。

(翻訳——中国の読者に原書の内容を紹介するほか——は、もう一つの重要な役割がある。それ

はわれわれのために中国の新しい現代言語を創り出すことである。)

魯迅はそれまでの中国の言語や文字が貧弱であったことを取り上げ、中国の言語が封建的残渣によって束縛されている現状を打破するために、新しい言語の創造が重要な使命であると新しい言語の創造を社会の進歩と結び付ける。しかも、ヨーロッパのルネサンスと違って、中国ではブルジョア階級はこの大任を果たすことができないため、プロレタリア階級がこの任務をやり遂げなければならないと提起する。

そして、「信」を翻訳の理念とする魯迅は、批判の矛先を『天演論』(T.H.ハックスリ『進化と倫理』)や『原富』(A.スミス『国富論』)などの翻訳で知られる学者の嚴復^(注8)にも向けた。「訳『天演論』例言」において、嚴復は「訳事三難」として提起したのが、後に翻訳の基準ともなった「信」「達」「雅」であった。「信」は原文に忠実であること、「達」は訳文が流暢であること、「雅」は文章が美しいことである。それに対して、魯迅は「彼(嚴復)は『雅』の一字で『信』と『達』を打ち消した」と指摘し、西洋の書物を中国の古文で翻訳する嚴復の作風を否定した。それによってもわかるように、魯迅は翻訳において「信」を強調するだけでなく、古文を排除し、大衆にわかりやすい「白話」(口語)の使用を提唱する。

三 文字のラテン化(ローマ字化)

異文化に学び、中国漢字のラテン化(ローマ字化)によって、識字人口を増やし、全国民の文化的素養を高めようというのが、魯迅が打ち立てた一つの目標である。それについて、魯迅は「中国語文の新生」^(注9)で次のように述べている。

中國現在的所謂中國字和中國文，已經不是中國大家的東西了。

古時候，無論那一國，能用文字的原是只有少數的人的，但到現在，教育普及起來，凡是稱為文明國者，文字已為大家所公有。但我們中國，識字的卻大概只佔全人口的十分之二，能作文的當然還要少。這還能說文字和我們大家有關係麼？

(中国の今のいわゆる中国字と中国文は、もはや中国のみんなのものではなくなった。

古の時、どこの国でも、最初は文字を使える人は少数であった。しかし今では、教育が普及してきて、およそ文明国と称する国では、文字はみんなによって共有されている。しかし、われわれ中国では、識字者は全人口の十分の二程度で、文章を作ることのできる人はなお少ない。それでも、文字はわれわれみんなに関係があると言えるだろうか。)

中国において識字率が低い理由の一つに、四角い漢字が複雑で覚えにくいということが挙げられる。魯迅が指摘したように「労働大衆は学ぶことも、習得することも不可能である。それどころか、財産や権勢のある特権階級も、十年二十年かけても、ついに習得できなかったケースも多い」^(注10)。だから、魯迅はラテン化が中国文字の「唯一の道」^(注11)として積極的に推進した。その前、戊戌変法失敗後、日本に亡命した王照^(注12)らが、日本の仮名に倣い、偏旁など漢字の一部を取り、

拼音文字を考案したなど、発音記号による文字の開発が進められていた。一方、魯迅の時代に進められていたラテン化文字には、致命的な欠点もあった。その点について、魯迅はすでに意識していた。

現在正在中國試驗的新文字，給南方人讀起來，是不能全懂的。現在的中國，本來還不是一種語言所能統一，所以必須另照各地方的言語來拼，待將來再圖溝通。反對拉丁化文字的人，往往將這當作一個大缺點，以為反而使中國的文字不統一了，但他卻抹殺了方塊漢字本為大多數中國人所不識，有些知識階級也並不真識的事實。^(注13)

(今まさに中国で実験されている新文字は、南方の人が読むと、全部わかるには無理がある。^(注14)今の中国では、もともと一つの言語で統一されていないため、それぞれの地方の言語で発音を表さなければならず、共通の基準は将来図るとする。ラテン化文字に反対する人は、往々にしてこれを大きな欠点とし、かえって中国の文字の不統一をきたしてしまうという。しかし、彼らは四角い漢字が大多数の中国人が識らず、知識階級の一部も実際には識らないという事実を抹殺した。)

中国にはわかっているだけで五十六の民族がいる。また、同じ民族でも、地域によって、方言など全く発音の異なる言語が用いられている。そのため、初期のコンピューターにおける中国語入力システムは、中国語の共通語を正確に発音できる少数の人たちにしか使えなかった。今日にいたって、発音が近似の漢字をすべて候補として表示するように設定できるため、ようやく誰もが使えるようになったほどである。

そして、中国において、ようやく実現したのは、漢字の簡略化（簡体字）である。中国文字の簡略化は、古来試みられてきた。甲骨文など初期の文字には、すでに簡略字が存在していたとされる。一九一九年の五・四運動に端を発した新文化運動において、白話文が提唱される中、文字の簡略化が新文化の一翼を担っていた。簡略化された文字——簡体字——が定着したのは一九五六年で、この年、中華人民共和国国務院の「漢字簡化方案公布に関する決議」と「漢字簡化方案」が公表され、中国やシンガポールなど一部の中国語圏で広く普及した。

魯迅らによって提唱された中国文字のラテン化はいまだに実現されていないが、異文化を積極的に受容し、それを以て中国を変えようとする彼らの精神と努力は、文字や文章を変えただけでなく、文化と社会全体の飛躍的な進歩をもたらした。

注1 「第一章 序」によれば、「Q」は「Quei」の略で、漢字を当てれば「桂」または「貴」、ただし不明という。

注2 『農報副刊』1922年11月4日、6日

注3 『京報副刊』1925年1月11日、2月12日

注4 『北斗』1931年12月20日

注5 趙景深、復旦大学教授。格言、「與其信而不順，不如順而不信」（信にして順ならざるより、順にして信ならざるに如かず）

注6 「風馬牛」『北斗』1931年12月20日

注7 『文学月報』1932年6月

注8 1854年～1921年

注9 『新生』1934年10月13日

注10 「關於新文字」『擁護新文字六日報』

注11 「漢字和拉丁化」『中華日報 動向』1934年8月25日

注12 1859年～1933年 清朝礼部主事などを歴任。

注13 「關於新文字」『擁護新文字六日報』

注14 中国の共通語は北方系方言の発音に基づくものである。

(そう しょうよう／中国史・中国思想)